

むかし、あるところに、魚釣りのじょうずな男がいました。

ある日のこと、男は、屋根の葺き替えをしようと、村の人たちに集まってもらいました。すると村の人たちは、

「おまえさんは、魚釣りがうまいから、きょうは屋根はおれたちにまかせて、魚を釣ってきてごちそうしてくれないか」といいました。男は、

「そんなら、屋根のほうはたのみます」といって、釣竿をかついで川原へ出かけました。

男がいっしんに釣っていると、いつのまにかそばに美しい女の人立っていて、じっと釣りを見ていました。男が顔をあげると、女の人は、ほほえんで、

「おまえさん、さかべつとうの浄土へ行ってみませんか」といいました。男は、なにげなく、「ああ」と答えました。女の人は、

「それでは案内しますから、少しのあいだ目をつむっていてください」といいました。男が目をつむると、女の人は男を背負って水にもぐったようで、しばらくすると、

「ここがさかべつとうの浄土です」といいました。

目を開けると、そこは、今まで見たこともなければ聞いたこともないりっぱな御殿の中でした。おどろいて見まわしていると、おおぜいの美しい女の人がいろいろなごちそうを運んできました。それから、女たちは美しい舞を舞って見せました。

毎日ごちそうを食べ、楽しく遊んでいるうちに月日がたち、はじめの女の人が、婿になつてくれないかといいました。男はしょうちしました。

夢のように楽しい日を送っているうちに、子どもが生まれ、孫が生まれ、ひ孫も生まれました。

ある日のこと、男は、ふと、ふるさとのことを思い出しました。

（おれは、屋根の葺き替えの日に川原へ魚釣りに出たまま、こうやって長い年月を楽しくくらししているけど、家はどうなっただろう）

そう思うと矢もたてもたまらなくなりました。そこで、女の人に、

「家のことが気になるので、帰って見てきたいんだ。すまんが、もとの川原まで送ってくれないか」といいました。女の方は、

「そんなことなら、しかたがありません。送ってあげましょう」といって、男を背負いませした。

男が目をつむっているうちに川原につきました。見ると、釣竿が置いてきたときのままになっていきます。いそいで家に帰ると、屋根葺きのまっさいちゅうです。村の人たちが男に気づいて、

「おお、もう帰ってきたのか。こんなに早く帰ったんでは、魚もたいして釣れなかったろう」といいました。男は、何が何だかわからなくて、ぼかんとしてしまいました。やっと気を落ちつけて今までのことを話すと、みんなは、

「ふしぎなことあればあるもんだなあ」といいましたとき。

原話：『加無波良夜譚』文野白駒編／三三社

再話：村上郁

さかべつとう：七、八月ごろの日の出前に、大群たいぐんをなして川面かわのほを遡さかのぼる白い蝶ちようの一種いっしゆ。太陽の上るころには死んで川を流れていくという。カゲロウ説せつとトビゲラ説がある。

